

多宝寺への御状

文永五年一〇月一日 四七歳

日蓮、故最明寺殿に奉りたるの書、立正安国論御披見候か。未萌^{みぼう}を知りて之を勘へ申す処なり。既に去ぬる正月、蒙古国^{かんちやう}の簡牒到来す。何ぞ驚かざらんや。此の事不審千万なり。縦^{たと}ひ日蓮は悪^{にく}しと雖も勘ふる所の相当たるに於ては何ぞ用ひざらんや。早く一所に集まりて御評議有るべし。若し日蓮が申す事を御用ひ無くんば、今生^{こんじやう}には国を亡ぼし後生^{ごしやう}は必ず無間大城に墮すべし。

此の旨方々へ之を申さしめし処なり。敢へて日蓮が私曲^{しきよく}に非^{くわ}ず。委しく御報^{あず}に預かるべく候。言^{ことば}は心を尽くさず、書は言を尽くさず。併^{しかしなが}ら省略せしめ候。恐々謹言。

文永五年^{戊辰}十月十一日

日蓮花押

謹上 多宝寺侍司御中